

野田九条通信

2011年4月
64号

「野田・九条の会」事務局
TEL 7122-0502
野田九条の会ホームページ
<http://www17.ocn.ne.jp/~art.9/>

福島原発最悪事態 原発緊急学習会開催

福島原子力発電所の崩壊。東電、政府、マスコミ一体となって伝える情報は限りなく不透明です。放射能による被ばく、周辺への拡散、時がたつほど事態の深刻さに怒りと不安が増します。原発の危険性は以前から言われていたにもかかわらず、

それらを指摘していた学者、ジャーナリストは全くマスコミには登場しません。そこで九条の会では、

長く福島原発で配管の現場監督として働いていた平井憲夫さん（97年癌で病死）の「原発がどんなところか知ってほしい」

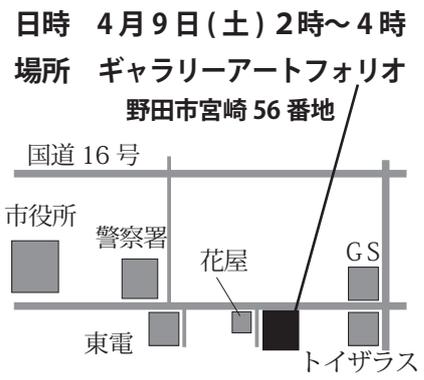
あとの60余年前の原子爆弾で世界に向かって非核を誓った日本が、同じ核の脅威に自ら

をもとに、原発の実態を知り、どうしたらいいのか、意見交換をしたいと思えます。

から平和を願い、二度と戦争が起きてはならないと思いはじめたのは子どもに授かった時からです。

やがて、野田子ども劇場と出会い、その仲間と真面目に平和について考える機会を得ました。全

核兵器廃絶を実現する会」とやたらに長い名前です。今年で、25周年を迎えます。毎年、広島長崎で開かれる原水爆禁止世界大会に小学生、青年の数名を送り出しています。被爆の事実を風化させることなく、若者に伝え、平和を守りたいと願っています。



突き進んでしまったことに対し、ここでUターンできるかどうか、私達に課せられていると思えます。ぜひご参加ください。

九条への想い

私の学生時代は70年安保の只中。どこの学校にも安保反対！打倒佐藤！等と書かれた大きな立看板が揚げられ、激しい学生運動が繰り広げられていました。全く無関心であった私は楽しい学生生活を謳歌していました。そんな私が心

核兵器廃絶の想いを 子どもたちに伝えたい

子ども核廃絶世話人 高木慶子

ベトナム戦争の終結の時期でもあり、戦争の悲惨さを肌で感じていたのでしよう。

国の子ども劇場の中から核兵器廃絶の運動が起りました。「子どものための舞台芸術関係者による

「九条への想い」募集中

東北関東大震災復興応援映画会

5月21日(土) ①10時半②2時
③午後6時 3回上映
櫻のホール 小ホール(予定)
前売り1,000円 当日1,500円
主催 上映実行委員会
連絡先 04-7157-3555

こんな災害の時こそ、命を守ることを第一に、困難に立ち向かっていく勇気をこの映画から受けたいと思います。開催経費を節約し被災地への義援金とします。皆さん、観に来てください！

「いのちの山河」 延期して上映へ

映画「いのちの山河」は日本国憲法制定を描いた「日本の青空」に続き、今回は憲法25条の生存権を描いたもの。長く無医村であった岩手県沢内村を乳幼児死亡率ゼロへと導いた深沢村長の物語。

危惧されていたとおりの 事故が起こってしまった

4月9日 緊急学習会

テキスト：平井憲夫「原発がどんなところか知ってほしい」

普通の職場環境とは全く違う

放射能というのは蓄積します。いくら微量でも十年なら十年分が蓄積します。これが怖いのです。(中略)例えば、定検工事ですと三ヶ月くらいかかりますから、それで割ると一日分が出ます。でも、放射線量が高いところだと、一日に五分から七分間しか作業が出来ないところもあります。しかし、それでは全く仕事になりませんから、三日分とか、一週間分をいっぺんに浴びせながら作業をさせるのです。これは絶対にやってはいけない方法ですが、そうやって10分間なり20分間なりの作業ができるのです。そんなことをすると白血病とかガンになると知ってくれていると、まだいいのですが……。電力会社はこういうことを一切教えません。

稼働中の原発で、機械に付いている大きなネジが一本緩んだことがありました。動いている原発は放射線の量が物凄いですから、その一本のネジを締めるのに働く人三十人を用意しました。一列に並んで、ヨーイドンで七メートルくらい先にあるネジまで走って行きます。行って、一、二、三と数えるくらいで、もうアラームメーターがピーッと鳴る。中には走って行って、ネジを締めるスパナはどこにあるんだ？といったら、もう終わりの人もいます。ネジをたった一山、二山、三山締めるだけで百六十人分、金額で四百万円くらいかかりました。

なぜ、原発を止めて修理しないのかと疑問に思われるかもしれませんが、原発を一日止めると、何億円もの損になりますから、電力会社は出来るだけ止めないのです。放射能というのは非常に危険なものです。企業というものは、人の命よりもお金なのです。

◆ いかげんな原発の耐震設計

阪神大震災後に、慌ただしく日本中の原発の耐震

数週間前の私たちなら、ここで語られている原発作業員たちの日常的な放射線被曝を、電力の罪悪感を持ちつつも現世社会を支える必要として目をつぶることはできたかもしれない。しかし福島第一の現実はその許さない。私たちは今、そしておそらくは今後かなりの年月、他人事であったはずの日常的な被曝という恐怖と向き合わなければならない。そして私たちは、これまで平井さんはじめたくさんの原発作業員たちが引き受けてきたものを自らが体験するはめになってようやく、原子力の本当の姿に気づきはじめている。その私たちに今必要なのは何か、それは、飲み食いするにも「線量」なるものの恐怖に震えている自分の「身体」に、この先も原子力エネルギーと共に生きる覚悟があるのか問いかけてみることではないだろうか。

設計を見直して、その結果を九月に発表しましたが、「どの原発も、どんな地震が起きても大丈夫」というあきれたものでした。私が関わった限り、初めてのころの原発では、地震のことなど真面目に考えていなかったのです。それを新しいのも古いのも一緒くたにして、大丈夫だなんて、とんでもないことです。1993年に、女川原発の一号機が震度4くらいの地震で出力が急上昇して、自動停止したことがありましたが、この事故は大変な事故でした。なぜ大変だったかという、この原発では、1984年に震度5で止まるような工事をしているのですが、それが震度5ではないのに止まったんです。これは、東北電力が言うように、止まったからよかった、というような簡単なことではありません。5で止まるように設計されているものが4で止まったということは、5では止まらない可能性もあるということなんです。つまり、いろんなことが設計通りにいかないということの現れなんです。こういう地震で異常な止まり方をした原発は、1987年に福島原発でも起きていますが、同じ型の原発が全国で10もあります。地震と原発のことを考えると、非常に恐ろしいことではないでしょうか。

◆ 原発がある限り、安心できない

みなさんは、原発が事故を起こしたら怖いのは知っている。だったら、事故さえ起こさなければいいの。平和利用なのかと。そうじゃないでしょう。私のような話、働く人が被曝して死んでいたり、地域の人が苦しんでいる限り、原発は平和利用なんかではないんです。それに、安全なことと安心なこととは違うんです。原発がある限り安心できないのですから。それから、今は電気を作っているように見えても、何万年も管理しなければならない核のゴミに、膨大な電気や石油がいるのです。それは、今作っている以上のエネルギーになることは間違いないんですよ。それに、その核のゴミや閉鎖した原発を管理するのは、私たちの子孫なのです。

だから、私はお願いしたい。朝、必ず自分のお子さんの顔やお孫さんの顔をしっかりと見てほしい。果たしてこのまま日本だけが原子力発電所をどんどん造って大丈夫なのかどうか、事故だけでなく、地震で壊れる心配もあって、このままでは本当に取り返しのつかないことが起きてしまうと。これをどうしても知って欲しいのです。

(テキストより一部転載)

平井憲夫さんは、執筆の翌年(97年)亡くなられました。